道徳のまち笠松の
ささえ合い通信 No.23

みんなの力で環境整備「トンボ天国クリーン大作戦」

7月9日、午前8時からの約1時間、「トンボ天国クリーン大作戦」を行いました。

トンボ天国は、県内でも最大規模のビオトープとして知られ、笠松町の自然の財産です。数年前に、国や町が行った整備事業に合わせて、環境を維持するとともに、まちを美しくする意識を高めようと、5年前から「トンボ天国クリーン大作戦」が始まりました。年々参加者が増え、6回目を迎えた今年度は、道徳のまち笠松推進委員会、トンボ池を守る会、笠松町が中心となり、広く町民の皆さんに参加していただき、総勢約250人での環境整備活動になりました。

初夏になると草や竹がぐんぐん伸び、通路から少し外れたところでも、背丈より高く生い茂ります。そして、その茂みの中にゴミが入り込んでいます。これを整備するには、かなりの労力が必要ですが、約250人が一斉に作業を行うと、またたく間にきれいになり、見違えるほど見晴らしがよくなりました。特に、今回は、岐阜工業高等学校の生徒が多数参加し、熱心に活動してくれました。

笠松町に関わりのある人々が協力し、まちの環境を整えることは、とても価値のあることだと思います。笠松町がもっと「きれいで住みよいまち」になるように、いろいろなところで力を合わせたいですね。

ボランティアに集まられた皆さん

茂みの中に入って清掃

かさまつの民話「昔むかし」

どんぐりがゆ④

「姉ちゃんのも大きな豆。」姉の留が箸でつまんでみせた。弥平が豆といったのは、きのう久平がひろってきた樫の実であった。米二勺に水一升樫の実一合、よめなひとつかみ、これがかゆのなかみであった。しかし、腹にこたえぬものばかり食べている子ども達にとって、樫の実は大変なごちそうであった。

「ほうら、また、お豆。」

「わたしもよ。」

「かあさんも。」

久平は、子どもや妻の笑顔をみながら「死なせはしない。新米のできるまで生かしておくぞ。」とつぶやいた。

あれから二十日もたったであろうか。となりの婆も、向かいの嘉七さも死んだ。しかし、久平のうちは、子どもや妻の顔にぶつぶつと赤いはれものができているだけで元気であった。米はまだ二升もあった。

稲は、久平が見て三分のできばえであった。まだ、月の半分は、雨かくもりであり、岐阜町では、百何人ものうえじにがでたというわさであった。

「とうちゃん。はらがいたいよう。」弥平は、顔中を赤紫にはらし、やっとのことで久平の方ににじりよってきた。肩骨がいかり、手足は骨そのものであった。せっかくのどんぐり粥もうけつけなかった。

となりの婆や嘉七が死んでから十日後であった。

久平自身も手足の指のまたから腹まで赤いぶつぶつができてひどい腹痛が続いていた。しかしそれが、どんぐり粥の毒だとは気づいていなかった。

（つづく）

かさまつの民話「昔むかし」は昭和54年に発行されました。
笠松中央公民館・松枝公民館・総合会館でご覧いただけます。